

ELF 時代の英語音声文法考察

—通訳技能向上との関連性において—

A Study on “Spoken Grammar of English” in the ELF Era,
with Special Reference to Advancement in Interpreting Competence

英米学科
大森裕實
Yujitsu O'MORI

緒言

英語という言葉について、今や英国語(British English)や米国語(American English)の観点からだけでは十分にとらえることができない国際共通語(lingua franca)であることを一般の英語関係者に知らしめた書籍は Penguin Books(初版は Pelican Books)の一冊として上梓されたクリスタル(David Crystal)(1988) *The English Language* [『英語—きのう・今日・あす』豊田昌倫訳, 1989]ではなかったかと思う。その後出版されたブライソン(Bill Bryson)(1990) *The Mother Tongue*, Penguin Books [『英語のすべて』小川繁司訳, 1993]や Crystal (1997/2003²) *English as a Global Language*, Cambridge U. P. [『地球語としての英語』國弘正雄訳, 1999]の記述を目の辺りにして、各書の版が改訂されるごとにその統計数字が刷新されて、世界における英語話者数が増加の一途を辿っていることを知ってもさほど驚かなくなった。

Crystal (1988)では、“母語”以外の存在としての“第二言語としての英語”(ESL)と“外国語としての英語”(EFL)の位置づけと実態が見事に描き出されていたが、そこには“国際語としての英語”(EIL)という術語は看取できなかった¹⁾。我が国における“国際英語”という新造語は、文化人類学者にして国際舞台で活躍した同時通訳者の國弘正雄に因るところが大きいと思われるが、残念なことに、“国際英語”という語句は最新の『広辞苑』第7版(岩波書店, 2018)においても未だ採録されてはいない。Crystal (1997)は一步進んで Global Language と命名し(EGL)、國弘もその趣旨に賛意を示す²⁾。また、鈴木孝夫は、日本人にとって“目的言語”から“手段言語”を経て、そのような存在に至った英語を“交流言語”と呼ぶ³⁾ [『日本は21世紀の世界に向けて何を発信するか』『英語が第二の国語になるってホント!?』國弘正雄編著, 2000]。さらに、カチル(Braj Kachru)の提唱する“世界諸英語”(World Englishes: WE)はスミス(Larry Smith)の活動と併せて相乗効果を惹起し、今や市民権を獲得しつつある⁴⁾。

ここで、日本人と英語との接触について言及しておくとするれば、かつての短波ラジオで FEN や VOA を雑音のなかで聞くのが精一杯だった環境からは脱却し⁵⁾、現在は BBC World や CNN をリアルタイムで視聴でき、インターネットではあらゆる情報が生の英語を通して入手できる状況にある⁶⁾。欧米の大学への留学要件として課せられる TOEFL や日本企業で注視される TOEIC といった英語能力試験で使用される英語も Received Pronunciation (RP) や General

American (GA) のような、英米のいわゆる“標準発音”だけではなくなくなったことが、当世の英語事情を雄弁に語っている。

さて、翻って、国際化時代におけるこのような英語の特徴と位置づけという観点に立脚して考えてみると、学習者の英語習得に際して“目標となるような何らかの発音モデル”の必要性の有無が問題となり、これが中等教育における学習指導要領に看取される“現代の標準的な発音”の問題と直截的に関連する。上掲の Kachru は WE を 3 種類 (L1: Inner Circle; L2: Outer Circle; L3: Expanding Circle) に分類し、L1 と L2 には優位異はないと主張する。L1 には、USA / UK / Canada / Australia / New Zealand が含まれ、話者数は約 3 億 2,000 万から 3 億 8,000 万人、L2 には、Singapore / India / Malaysia / Philippines / Bangladesh / Ghana / Kenya / Nigeria / Sri Lanka / Pakistan 等 50 ヶ国が含まれ、話者数は約 3 億から 5 億人を数える。また、L3 には、China / Japan / Greece / Poland / Egypt / Saudi Arabia / Israel / Nepal / Zimbabwe / Russia 等多くの国々が含まれ、話者数は約 5 億から 10 億人である(統計の取り方次第で数字のばらつきが生じることに加えて、漸次的に数字が増加する) [Crystal 2003²: 61]。学習者が L1 や L2 (ESL) として英語を習得する環境 (Kachru の Inner Circle と Outer Circle) にある場合には、その必然性から、人々を取り巻く社会で使用される発音型がモデルとなることは想像に難くない。他方、L3 (EFL) として習得される場合 (Expanding Circle) というのは、その動機が社会的必然にあるのではなく、学習者個々人の事情 (勉学・仕事・家族・ボランティア活動等) によって異なり、それはいわゆる「学習」と同義といてよい。それでは、EFL 環境にある教室における「学習」には、どのような発音型がモデルとして必要とされるのか⁷、換言すれば、いかなる基準を満たせば国際化時代の EIL/EGL の習得として認定されるのか、さらには、その実現のための効果的教授法は果たして存在するのだろうか。これら惹起する問題に対して果敢な取り組みも始まっている。

ところで、従来から、英文法といえば、文字情報に依存した読み書きのための英語能力を支える、いわば **Literal Competence** を一般に意味している。当然のことながら、英文が使われる **reading** の文脈 (Context) においてこそ、その意味は正しく解釈される。而して、コンテキストから当該文を剥離して、その解釈を試みることは、初級中級学習内容程度であれば容易だが、上級学習内容ともなると、それは至難の業となる。換言すれば、英文法の例文や練習問題を解く作業は、実は、当該例文の使われるコンテキストを脳裡に再構築する作業を行なっていることに他ならない。他方、英語音声学の知識といえば、音声情報に依存して、聴き話すための英語能力を支える、いわば **Oral-Aural Competence** を一般に意味していることは明らかであるが、これもまた、別個の学科目として英語学習カリキュラムに存在する。このことは、当該文が使用されるコンテキストの再構築にとって必要な音声情報に関する知識が、眞の意味で、実践的かつ正確な言語運用を裏打ちする文法知識の枢要な位置を占めるという機能主義的観点 (語用論的観点) がほとんど認識されてこなかったのではないかと推測させるに足る事実である。高等教育のみならず中等教育においてもまた、英語によるプレゼンテーションやディベートを導入する心意気はよいが、脳の可塑性の弱化と一側化が進んだ年齢に到達した学習者に対して合理的な説明もなく、まるで「水に飛び込めば泳げる」と前時代的指導をしていることに早く気づくべきである。

そこで本稿では、文法知識の記述と音声知識の記述とのインターフェイスは何かということ、また、それを体系化した **Communicative Grammar** 記述の可能性について、いくつかの事例を参考に、その端緒を考究する。

1. 連続発話(Connected Speech)における脱強勢化(De-accentuation)

ここ数年、ロンドン大学(UCL)において開催される英語音声学セミナーで Michael Ashby 氏が音声指導に組み込む「情報構造に着目した、旧情報の強勢の脱落と新情報への強勢の附与」(de-accenting old information)という談話構造に立脚した視点及びそのトレーニングは注目に値する。例えば、次の A-B の対話文の場合の強勢附与を考えてみるとよい。

eg.1. (A) I'm HUNgry.

(B) You're ALways hungry.

eg. 2. (A) Do you like RAW TUna?

(B1) I've never TRIED raw tuna.

(B2) I like ANY kind of fish.

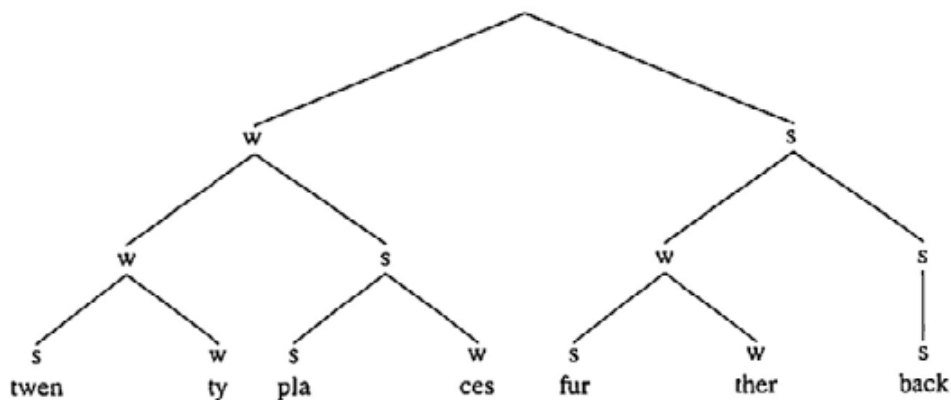
eg. 3. (A) Do you like my NEW GLASSES?

(B1) I didn't notice you'd GOT new glasses.

(B2) Well they suit you better than the OLD pair.

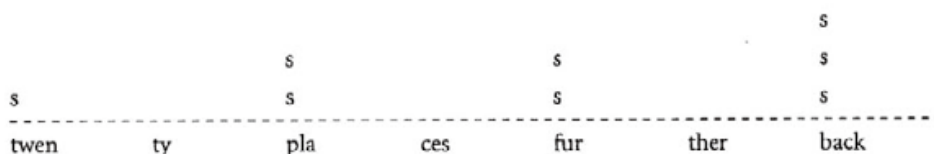
(Ashby's Material: Rhythm, Intonation and Fluency in English, 2011 の一部を改編)

英語の句構造——例えば、“twenty places further back”における強勢(stress)附与の原則は、通常、英語音声学・音韻論の知識の一部として、次のように示される。



(Roach 2002: 109)

これを Metrical Grid Theory に基づいて示すと次のようになり、s (= strong)マークの強音節の積み重なるの最も大きい部分に最大強勢が置かれることを明らかにしている。



(Roach 2002: 109)

この音声情報は、従来から、英語は「文末焦点化(end-focus)」「文末重点化(end-weight)」の言語であると文法が指摘してきたことと合致する⁷⁾。簡単にいえば、特定コンテキストから離れて、無標形(unmarked form)の場合、「文末にくる内容語(content word)に最大強勢が置かれる」ということを意味している。

しかし、実際の英文の発話は、談話(discourse)の中で生じるため、特定コンテキストから離れて、意思伝達が行なわれることはない。そこで、本節冒頭に掲げた例文のように、強勢の附与——文末内容語が旧情報の場合に、そこから左へ、1 ランク低い強音節をもつ内容語(新情報)に強勢附与が移動するという原則からの逸脱、換言すれば、脱強勢化(de-accentuation)が生じる。こうした現象を取り扱ったものに D. R. Ladd (1978) *The Structure of Intonational Meaning: Evidence from English*. があり⁸⁾——Ladd では“Default Accent”として説明されているが(1978: 81-83)、一般に利用される音声学テキストにおいて、その記述はほとんど見受けられない。ここで、Ladd の指摘する事例を一つ確認しておく。

eg.4. (A) Has John read *Slaughterhouse-Five*?

(B) No, John doesn't READ books.

(Ladd 1978: 81 の表記の一部を改修)

この例では、(A)の発話において、*Slaughterhouse-Five* という書名が一度言及されているので、それを受けた(B)の発話では、同種の意味内容をもつ books が旧情報となり、1 つ前の動詞 read が“Default Accent”を獲得するという説明が成り立つ。このことは、本節冒頭に掲げた 3 事例についても適用される⁹⁾。

一般的にあって、英語音声指導において、分節音素(segmental phoneme)を超えた強勢リズム(stress-timed rhythm)及び等時性(isochronism)の理解と習得、加えて、抑揚(intonation)のもつ重要性——文型の識別と話者の心的態度(attitude)への理解を強調し、超分節音素(suprasegmental phoneme)の学習に結びつけることは、英語らしさの獲得にとって不可欠であり、中上級学習者に対してよく行なわれているところであろう。しかし、一歩進んで、談話(あるいは対話)の中でやり取りされる音声情報、換言すれば、語用論的音声情報の意味を体系的に学ぶ機会が提供されることはあまり多くはない。本節における視点は、活きた英語をとらえる文法記述にとって、極めて有意義である。

2. 文構造と音声情報(Phonological Information)

2.1 複文における従属節

一般的な学習英文法において、時・理由・条件・譲歩などを表わす従属節を伴う複文の場合に、従属節が左移動(前置)した文構造が可能であること、また、そうした複文がしばしば見受けられることはよく指摘される。しかし、その場合に当該文が取る抑揚(intonation)については、同時に記述されることは少ない。次の例文は、英語音声学のテキストからの抜粋であるが、いずれも、下降上昇調(Fall-Rise) [Br.E] あるいは水平調(Level) [Am.E]と呼ばれる特有の韻律を示すが、そのような音声情報を文法記述の際に盛り込むことができれば、眞の意味での調和型の実践英文法が提示できるであろう。

- eg.5. If you don't leave now, ↗ I'm calling the police. ↘
 eg.6. When the war ended, ↗ she was forty years old. ↘
 eg.7. Since she started a diet, ↗ she's lost over 8 kilos. ↘
 eg.8. Although the car is old, ↗ it still runs well. ↘
 eg.9. No matter what the reason is, ↗ most people do not want to leave
 their native country. ↘
 eg.10. If you want to learn English, ↗ you should try to speak it all the
 time. ↘

(杉森 1997: 122 の表記の一部を改修)

2.2 否定の射程(Scope of Negation)

次のような構造的曖昧性 (structural ambiguity) をもつ文は、生成文法の構成素統御 (C-command) に関連する演算子 (operator) の作用域の問題として取り上げられ、当該理論の説明力の高さを証明する。

- eg.11. a Mike did not marry Nancy because she was a highbrow.
 11. b It was NOT the case that Mike married Nancy because she was a
 highbrow.
 11. c It was because she was a highbrow that Mike did not marry Nancy.

上掲例文 11.a の場合、because に導かれる従属節の階層構造的な位置について 2 種類の可能性があり、それが意味解釈 11.b 「Mike は Nancy がインテリだったから結婚したわけではない」と意味解釈 11.c 「Mike は Nancy がインテリだったから Nancy と結婚しなかった」を生む。つまり、この違いは、11.b は否定辞 not の作用域が文末まで (because 節まで) 及んでいるが、11.c は従属節 (because 節) が否定辞 not の作用域に入らないことに起因する。従って、2.1 節で指摘した従属節の左移動 (前置) —— Because she was a highbrow, Mike did not marry Nancy. が可能となるのは、11.c の意味解釈の場合のみとなる。

しかし、こうした階層構造による説明には首尾一貫性が認められ、有益な解析であることに間違いはないものの、そこに活きた言語のもつ勢力 *Drang* が感じられない¹⁰⁾。それはおそらくは、発話者と聴者が共存する場面 (context) に必要な音声情報が欠落しているからであろう。

同様の例文に少し音声情報を附加してみよう。

- eg.12. a Mary did **not** leave home **because she was afraid of her father.** /↗↘
 12. b Mary **didn't** leave home / because she was afraid of her father. /↘

上掲の例文中の「 / 」は “sense group” の切れ目を表わし、「 // 」は “breath group” の切れ目を表わす。従って、12.a の場合に because 節を前置することはできないが、12.b の場合には可能である。また、否定辞の縮約形 (-n't) の使用は 12.a の場合には不可である——12.a の場合の否定辞 not の意味情報量は大きいため、音声情報量も必然的に重くなる。

こうした文法記述における音声情報の重要性に気づいた先駆的文法書に Leech & Svartvik, *A Communicative Grammar of English* (1975) がある。それ以後に、それに取って代わる文法書は出ていない——Biber, D. et al., *Longman Grammar of Spoken and Written*

English (1999) の記述と編纂に Geoffrey Leech (1936-2014) は十分な貢献を果たして、各章における Language in Use の側面や Chapter 14: The Grammar of Conversation に話し言葉情報を入れ込むことに成功してはいるが、残念ながら、実用性の高い *A Communicative* とは趣を異にした文法書である。*A Communicative* の真骨頂は、次のような文法記述の工夫に見受けられる。

eg.13. a They weren't at home for the whole đay.
(It's not true that they were at home for the whole day.)

13. b They weren't at hóme | for the whole day.
(For the whole day, they weren't at home.)

(Leech & Svartvik 1975: 120 の表記順を改編)

2.3 比較構文と強勢附与

前節で述べた構造的曖昧文の別事例として、比較構文はしばしば問題となる。文字情報だけでは、何と何が比較され、どこが省略されているのかについての手懸りの提示が稀薄であるからである。

eg.14. a John likes Mary better than Nancy.
14. b John likes [|]Mary better than [John likes] [|]Nancy.
14. c [|]John likes Mary better than [|]Nancy [likes Mary].

例文 14.a に対する通常の日本語訳「ジョンはナンシーよりもメアリーが好きだ」もまた曖昧文である。よく考えてみると、14.b では、動詞 likes の対象(目的語)2 つが比較されており、「ジョンはメアリーと比べるとナンシーのほうが好きだ」という意味解釈となるが、他方、14.c では、動詞 likes の動作主(主語)2 つが比較されており、「ジョンがメアリーを好きな程度は、ナンシーがメアリーを好きな程度よりも大きい」という意味解釈を許す。日常的な経験からは、14.b の意味解釈のほうが無標形(unmarked form)で一般的であると認知され、14.c の意味解釈は有標形(marked form)で特殊であると認知される傾向が認められる。そのため、文字情報による従来の学習文法記述では、14.c については、“John likes Mary better than Nancy does.”のように、代動詞 do を than に導かれる節中に入れて、Nancy が主語であることを明示する。あるいは、斜字体を用いて、“*John likes Mary better than Nancy.*”と表記する工夫は可能であり、文芸作品やその他の英語 passage でもよく見受けられる。

しかし、14.b や 14.c に示したように、強勢マーク「|」を附与するというような、極めて簡単な音声情報附加によって、意思伝達に適った英文法記述を可能とし、構造的曖昧性を考慮したり、同一事象をとらえる際の視点の違いを意識する心的態度の構築に寄与することができる。

2.4 副詞(only)の位置と強勢附与

副詞 only の用法に関して、日本人学習者に誤解の多いことは Petersen (2013:105-20) に指摘のあるところである——副詞 only の位置について、「基本的には(only は) 修飾する語の直前に置かれる」という原則があるという。

しかし、次のような事例は、構造的曖昧性をもつ。

eg.15. Adam **only** repairs guitars. (Petersen: 115)

この例文の文字情報だけでは、副詞 **only** が動詞 **repairs** を修飾する意(「アダムはギターを修理するだけだ」)なのか、副詞 **only** が動詞句内目的語の **guitars** を修飾する意(「アダムが修理するのはギターだけだ」)なのかについては、判然とはしない。これも文芸作品等であれば、前者の意味解釈なら “Adam **only repairs** guitars.” (= As for guitars, Adam **only repairs** them. / Adam **only repairs** guitars; he never plays them.)、後者の意味解釈なら “Adam **only repairs guitars.**” と斜字体で表現することは可能である (Petersen 2013: 116)。

しかし、この場合でも、音声情報を文字情報に附加することができれば、意思伝達に適った英文法記述が容易に可能となるのである。

eg.15'. Adam **only** **!repairs** guitars.

15". Adam **only** repairs **!guitars**.

2.5 ポライトネス(politeness)を意識した Tact Grammar

20 世紀に擡頭した語用論 (Pragmatics) の分野において、ポライト (politeness) に関わる研究には特段の関心が払われてきたといえる。そうした側面を意識して記述する文法を Tact Grammar / Discourse Grammar と呼んでもよいが、Leech & Svartvik (1975) には「如才なさ」を喚起する否定疑問文の使用についての興味深い説明が看取される。

eg.16. a Won't you come in and sit dówn? ↗

16. b Couldn't you possibly come anóther day? ↗↗

(Leech & Svartvik 1975: 147 の表記の一部を改修)

上掲の例文は、要請 (request) という心的態度を伝えるための丁寧表現であるが、まず、「如才なさ」を具現化するために、16.a のように、法助動詞の過去形が使われることが多い。次の手段としては、聞き手が yes の答えをすると十分に予期しながら、否定疑問形が使われる——この疑問形は、否定的回答を期待するものではない。そうすることにより、「試しに尋ねてみる (tentative)」といったニュアンスを減減させ、むしろ「説得的な (persuasive)」含意を聞き手に与える効果がある。このようにして、例文 16.a は「お入りになって、お座りになりませんか」、16.b は「別の日にお越しにはなれませんか」という意味解釈を許すことになる。

さらに、相手の誘いに対する丁寧な断り (polite refusal) についても、韻律情報を伴った次の例が参考になる。

eg.17. (A) Are you doing anything tomorrow évening? ↗

(B) Nó. ↗

(A') Then perhaps you'd be interested in joining us for a meal at a restaurant in tòwn.↗

(B') Well, that's very kínd of you↗↗ — but I'm afraid I have already arranged/promised to ... What a pìty.↗ I would have so much enjòyed it.↗↗

(池上 1998: 262-3 の表記の一部を改修)

特に、ポライトネス表現はコンテキストの中において初めて機能するものであるため、その学習

に際して、当該コンテキストを頭の中で再構築して意味解釈を行なう必要がある。そのために、音声情報は不可欠な要素であるといわざるを得ない。そうした音声情報は、通常は、学習者の経験的知識から導き出されるものであろうが、英語使用の実体験に乏しい(外国語としての)英語学習者にとっては、学習英文法の中で提示されなければ、当該コンテキストの再構築は困難を極める。而して、文字情報に対する音声情報の附加は、学習者に余分な負荷を附加することに寄与するのではなく、学習者の負荷を軽減することに貢献するものであるといえる。

3. 談話の指標 (Discourse Marker) とプロソディー(Prosody)

ここでいう談話 (discourse) とは、伝統文法でいう連文 (connected speech) に相当するが、Swan (2005³:§157) の定義する“pieces of language longer than a sentence”を意味し、そこには、話しことば表現も書きことば表現も含まれると考えてよい。

ところで、談話の指標 (discourse marker) には、さまざまな機能をもつ副詞類 (adverbials) が考えられる——1. focusing and linking (with reference to 類) ; 2. balancing contrasting points (on the other hand 類) ; 3. emphasising a contrast (however 類) ; 4. similarity (in the same way 類) ; 5. concession and counter-argument (it is true, all the same 類) ; 6. contradicting (on the contrary 類) ; 7. dismissal of previous discourse (at any rate 類) ; 8. change of subject (by the way 類) ; 9. return to previous subject (as I was saying 類) ; 10. structuring (first of all 類) ; 11. adding (moreover 類) ; 12. generalising (on the whole 類) ; 13. giving examples (for instance 類) ; 14. logical consequence (as a result 類) ; 15. making things clear, giving details (that is to say 類) ; 16. softening and correcting (in my opinion, I mean 類) ; 17. gaining time (let me see 類) ; 18. showing one's attitude what one is saying (honestly 類) ; 19. persuading (after all 類) ; 20. referring to other person's expectations (as a matter of fact 類) ; 21. Summing up (in conclusion 類) [本分類は Swan 2005³: §157 参照]。

しかし、本節でこれらすべてを扱うことは紙幅の関係上困難であるので、ここからは、いわゆる文副詞類 (sentence adverbials) に特化して、考察を進めることにする。Leech & Svartvik (1975: §479) に依拠すれば、文副詞類は、話者が述べている内容についての話者自身の評言 (comment) を伝える機能をもつと定義され¹¹⁾、そうした機能をもつ副詞類には次のようなものがあると列記されている—— admittedly, certainly, definitely, indeed, surely; perhaps, possibly; in fact, actually, really; officially, superficially, technically, theoretically; fortunately, hopefully, luckily, naturally, preferably, strangely, surprisingly など。

ほとんどの文副詞類の通常位置は文頭であり、話しことば (spoken) では音調単位 (tone unit) で後続部と区切られ、書きことば (written) では読点 (comma) で後続部と区切られる。

eg.18.a (written) Obviously, they expect us to be in time.

18.b (spoken) Obviously | they expect us to be in time |

(Leech & Svartvik 1975: 202 の表記の一部を改修)

これに倣って、Leech & Svartvik (1994²:§463) で挙げられた例文に韻律情報を附加した表記モデルを示して、参考に附す。

- eg.19. a Certainly | her French is very fluent.
 19. b Of course | nobody imagines that he'll ever repay the loan.
 19. c Strangely enough | his face reminds me of Miss Peters.
 19. d Surely | no other novelist can give such a vivid description.
 19. e Unfortunately | that is an oversimplification of the problem.

結局のところ、本節で考察の対象とした談話の指標は、相当幅広い範囲に及ぶため、その機能との関連において、統語情報（副詞類の位置の制約）とならんで韻律情報（intonation pattern）が意思伝達に重要な役割を演じることを強調しておかねばならない。例えば、actually という談話の指標は上掲 20 の類に属するが、その機能はさまざまである。

eg.20. (A) Did you enjoy your holiday?

(B) Very much, actually.

eg.21. (A) Did you enjoy your holiday?

(B) The weather was awful. Actually, the campsite got flooded and we had to come home.

eg.22. (A) How was the holiday?

(B) Well, actually, we didn't go.

(Swan 2005³: § 157 の表記の一部を改編)

例文 20(B)の場合は、相手が推測していることが当たっていること(somebody guessed right)を示す強意表現であり、21 (B)の場合は、附加的情報を導入するために(to introduce additional information)使われる指標となっている。それとは対照的に、22 (B)の場合は、回答が予想外の結末であったこと(expectations were not fulfilled)を提示する指標となっており、その抑揚は典型的な下降上昇調(Fall-Rise)であろう。

最後に、日本人学習者がしばしば誤解をしている after all という談話の指標について言及しておきたい。この指標は、上掲 19 の類に属するもので、10 の類に属する finally や at last とは機能が異なる。Swan (2005³: § 157)に依拠すれば、“after all suggests this is a strong argument that you haven't taken into consideration”という含意であることに留意が必要である。而して、その含意を表わすのは、ここでも下降上昇調(Fall-Rise)の抑揚であるということができ、そうした韻律情報を盛り込んで記述することの重要性を改めて主張しておきたい。

eg.23. I think we should let her go on holiday alone. After all, she is fifteen – she's not a child any more.

(Swan 2005³: § 157 の表記の一部を改修)

(なんだかんだ言っても[まあ、結局のところ]彼女も 15 歳で、もう子供ではないのですからね。)

結言

本論考では、Written Grammar と Spoken Grammar の融合を目指し、眞の意味で、コミュニケーションに役立つ英語文法を構築し、通訳技法に寄与するための端緒として、文脈(context)の中で英語表現の機能をとらえ、それを記述することを試みた。20 世紀後半から今世紀にかけて、社会言語学、語用論、談話分析及び談話文法アの研究成果は著しいものがある。しか

し、学問が発展すればするほど、研究分野が専門性を強化して、より深く細分化される傾向にあり、大局的な見地から、音声研究の知識が文法記述に反映されているとはいえない状況は、何とか解決されなければならない課題そのものである。それにもかかわらず、*A Communicative Grammar of English* の公刊以来、そうした要望に応える、*Tact Grammar* と呼ぶことのできる実用的な英文法書の存在は、寡聞にして知らない。

本論考で扱った「情報構造に基づく脱強勢化の原理」「従属節の前置と韻律」「否定の射程と韻律」「丁寧表現と韻律」「談話指標と韻律」は、いずれも音声情報を文字情報に載せることにより相乗効果を増す文法記述の好例であり、今後の当該分野発展のための道標的役割を果たしていることは言を俟たない。

(附記)

本論考は、科研費報告書に相当する『応用英語音声学研究』(2015) (日本学術振興会科学研究費補助金[基盤研究(C)課題番号 25370738])所収の拙稿「音声英語文法構築への試み」(pp. 71-84)の一部に加筆修正を施したものである。

註

- 1) 同書の改訂版 *Crystal* (2003²) では、アラブ首長国連邦に住むドイツ出身の技師の父とマレーシア出身の母をもち、この夫妻の共通言語である英語で育った子供の場合に、“母語”と“外国語としての英語”の境界は極めて曖昧なものになるという事情も追記された。
- 2) 『地球語としての英語』(みすず書房, 1999)「訳者解説」(pp. 195 -215)参照。
- 3) この場合の“交流言語”とは、例えば、ドイツ語の分からない日本人と日本語を知らないドイツ人がパリの国際市場で出会った場合に“相互の意思伝達のために選択される言語”を意味しており、現状では「英語」が選択される可能性が最も高いといえる [鈴木 2000: 158-162]。
- 4) 日本の大学の中に *WE* を英語名として戴く学部(国際英語学部を *College of World Englishes* と表記)まで登場するような時代になったことは特記すべき事態であろう。
- 5) ここで言及した *VOA* を始めとする海外英語ニュース音源は今ではインターネット上で視聴することができる。例えば次のような URL を参照されたい。
 - ① *VOA* (<http://www.voanews.com/english/news/>)
 - ② *VOA* (<http://www.voanews.com/learningenglish/home/>)
 - ③ *ABC* (<http://www.abcnews.go.com/>)
 - ④ *BBC* (<http://news.bbc.co.uk/>)
 - ⑤ *CBS* (<http://www.cbsnews.com/>)
 - ⑥ *CNN* (<http://www.cnn.com/>)
 - ⑦ *ABC* (<http://www.abc.net.au/>) [Australia]
- 6) *Communicative Ability* といえば、かつては口頭伝達(話しことば)に特化して考えられてきたが、インターネットの普及により、書きことばを手段とする即時反応型の外国語運用能力も求められるようになった。小林薫曰く、「口頭英語ばかりか書く英語が *interactive* で、*real time* で、*on-line* でならなければならないことが影響しています。問題は、書かれたものであれ口頭であれ、英語で *express* する面と *response* する面との間に、日本ではギャップがあったことです」[英検 *Step News* 375 号(1997): 21]。

- 7) 文末焦点化(end-focus)及び文末重点化(end-weight)については、Randolph Quirk, et al., *A Grammar of Contemporary English* (1972: §14.8) 及び *A Comprehensive Grammar of the English Language* (1985: §§18.3-18.9) に詳しい。
- 8) D. R. Ladd (1978) の著作については、同僚の熊谷吉治准教授(愛知県立大学外国語学部)からのご教示に依る。特記して、謝意を表す。
- 9) 今井邦彦(1989)『新しい発想による英語発音指導』pp. 164-165 では、Ladd 説に拠らず、コンテキストから意味が希薄になっている read books という句に対して、特に意味希薄な read という動詞に強勢を置くことにより、「発話の強化」を図るためであると説明する——「ジョンていう奴はそもそも本を読むということをしなない男なんだ」。
- 10) この表現は、泉井久之助博士(1905-83)がサピア (Edward Sapir, 1884-1939) が著わした *Language* (1921) の中で提唱した Drift 説を評する際に、ソシュール(Ferdinand de Saussure, 1857-1913) の言語観と対照して使用した言評である「Edward Sapir—その *Language* を中心として」『英文法研究』3 巻 1 号, pp. 2-7 (1960) 参照。生成文法(Generative Grammar)といえども、構造主義言語学を出自としていることの証である。
- 11) Leech & Svartvik (1975/1994²) では話し手の“comment” (論評) 機能と表記されているが、本稿筆者としては、そうした副詞類が法助動詞で代替されることを考慮に入れると、“assessment” (査定) 機能と表記したほうが適していると考え。

参考文献

- Ashby, Michael. (2011) *Rhythm, Intonation and Fluency in English* (Material of Summer Course in English Phonetics, UCL).
- Biber, Douglas, et al. (1999) *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Longman.
- Bryson, B. (1990) *Mother Tongue: the English Language*. Penguin Books.
- Cruttenden, Alan. (2014⁸) *Gimson's Pronunciation of English*. Routledge.
- Crystal, D. (1988) *The English Language*. Penguin Books.
- Crystal, D. (1997/2003²) *English as a Global Language*. Cambridge U. P.
- 日野信行(2008)「国際英語」『スペシャリストによる英語教育の理論と応用』(小寺茂明・吉田晴世 編著), 15-32. 松柏社.
- Hughes, A., Trudgill, P. and Watt, D. (2005⁵) *English Accents and Dialects*. Hodder Arnold.
- 今井邦彦(1989)『新しい発想による英語発音指導』大修館書店.
- International Phonetic Association. (ed.) (1999) *Handbook of the International Phonetic Association*. Cambridge: Cambridge U. P. [竹林滋・神山孝夫(訳) (2003)『国際音声記号ガイドブック』大修館書店.]
- Jenkins, J. (2000) *The Phonology of English as an International Language*. Oxford U. P.
- Jenkins, J. (2007) *English as a Lingua Franca: Attitude and Identity*. Oxford U. P.
- Kachru, B. (1985) Standards, Codification and Sociolinguistic Realism: the English Language in the Outer Circle, *English in the World*, eds., R. Quirk and H. G. Widdowson, Cambridge U. P., 11-30.
- 兼弘正雄(1975)『改訂 英語音声学』山口書店.
- 城生百太郎 他 [編] (2011)『音声学基本事典』勉誠出版.

- Ladd, D. Robert Jr. (1978) *The Structure of Intonational Meaning: Evidence from English*. Indiana University Press.
- Leech, Geoffrey and Svartvik, Jan. (1975/1994²) *A Communicative Grammar of English*. Longman. [現在第3版が Routledge から出版されている]
- [邦訳 (第2版)『現代英語文法<コミュニケーション編>新版』池上恵子, 紀伊國屋書店, 1998.]
- 大森裕實(2002)「British English の最近の発音変化に関する一考察—Received Pronunciation と Estuary English—」『愛知県立大学 外国語学部紀要(言語・文学編)』34号, 25-35.
- 大森裕實(2007)「書評 Jennifer Jenkins (2000) *The Phonology of English as an International Language*」『JACET 中部支部紀要』第5号, 57-63.
- 大森裕實 [編著] (2015)『応用英語音声学研究』中部応用言語学研究会.
- Petersen, Mark. (2013)『実践 日本人の英語』岩波書店.
- Quirk, R. et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
- Ramsaran, S. (ed.) (1990) *Studies in the Pronunciation of English*. Routledge.
- Roach, P. (2002⁴) *English Phonetics and Phonology*. Cambridge U. P.
- [邦訳 (第2版)『英語音声学・音韻論』島岡 丘・三浦 弘, 大修館書店, 1996.]
- 島岡 丘(1994)『中間言語の音声学』小学館プロダクション.
- 清水克正(1995)『英語音声学—理論と学習』勁草書房.
- 杉森幹彦 他(1997)『音声英語の理論と実践』英宝社.
- 竹林 滋(1996)『英語音声学』研究社.
- 田辺洋二(2003)『これからの学校英語—現代の標準的な英語・現代の標準的な発音』早稲田大学出版部.
- 鳥居次好・兼子尚道(1962)『英語の発音—研究と指導』大修館書店.
- 鳥居次好・兼子尚道(1969)『英語発音の指導』大修館書店.
- Svartvik, J. and Leech, G. (2006) *English: One Tongue, Many Voices*. Palgrave Macmillan.
- Swan, Michael. (2005³) *Practical English Usage*. Oxford U. P.
- [邦訳 (第3版)『実例 現代英語用法辞典』吉田正治, 研究社, 2007.]
- Thomson, A. J. and Martinet, A. V. (1986⁴) *A Practical English Grammar*. Oxford U. P.
- [邦訳 (第4版)『実例英文法』江川泰一郎, Oxford 大学出版局, 1988.]